尾張藩主・藩士の訪れた伊奈波神社

筧　真理子
（岐阜市歴史博物館学芸員）

江戸時代の岐阜町（ほぼ、現在の金華校区に当たります）は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いののちに幕府の直轄領となり、元和五年（一六一九）から隣国尾張の徳川家の領地に組み込まれました。歴代の尾張藩主は、幕末の政情多端な時期を除いて、領内の主要な町を訪れましたが、岐阜町もその一つです。これを「岐阜御成（おなり）」と呼び短いときは一泊二日、長い場合は四泊五日の日程で岐阜町に滞在しました。宿泊場所は、伊奈波神社のすぐ北にあった岐阜奉行所の向かいの賀島家でした。

歴代藩主が岐阜御成の間にどのような行動をしたかがくわしくわかっているわけではありませんが、必ず行われたのが鵜飼見物と金華山登山です。このころの金華山には鹿がたくさんいたらしく、万治元年（一六五八）に二代藩主徳川光友が猟をしたときは弓や鉄砲、網などで鹿八五頭をしとめたほか、兎・狐を捕獲しています。江戸時代初めの岐阜町への通達では、金華山から鹿が町におりてきても強く脅してはいけないこと、犬を飼わないこと、死んだ鹿を町中でみつけたら御山番に届け出ることが命じられており、領主の狩の対象として保護されていたことを示しています。また御成のときには鵜飼舟も小瀬・長良から合わせて二一艘が繰り出されました。異色の藩主として有名な七代藩主む宗春の岐阜御成には、町をあげて踊りを披露し、花火を揚げる大騒ぎでした。宗春自身も遊女をあげて遊んだり、伊奈波神社境内の水茶屋に立ち寄ったり、またおしのびで出かけた先で自ら踊ってみせるなど、かなり羽目をはずしたようです。

こうした楽しみのほかに、時間に余裕があるときには特産物や治水状況などを視察し、町内外の名所を回りました。伊奈波神社は宿泊場所のすぐ近くに位置し、時間がない場合でも乗物の中から神殿を拝することは行ったようです。宗春も岐阜に着いた翌日に早速参詣しています。

天保一四年（一八四三）の一二代藩主斉荘（なりたか）の岐阜御成では、名古屋へ帰る日の早朝に提灯をともして参詣してから岐阜を出発しました。

このように尾張藩主から崇敬された神社ですから、その建物なども藩主が寄進しています。貞享二年（一六八五）、二代藩主光友によって社殿が造営され、四月一四日に遷宮が挙行されました。写真1は現在当館でお預かりしているこの年の棟札ですが、これとは別のものもあり、『伊奈波神社略誌』には「尾張国司正三位行中納言源朝臣光友公」とともに神主の塩谷延満や岐阜町年寄らが名を連ねる棟札が掲載されています。代々の塩谷氏は、藩主への御目見も許されていました。

神社を訪れたのは、もちろん藩主だけではありません。岐阜町の人が日常的に参拝したことは、町役人であった柴田家の日記からうかがえます。また周辺の人たちも参詣したでしょうが、それらは身近すぎるためかとりたてて記録されていません。しかし、尾張藩士など遠方から訪れた人の日記類には、伊奈波神社に参拝したことがしるされています。

細野要斎（一八一一～一八七八）は禄高一五〇石の尾張藩士で、儒学や神道を学んで藩校明倫堂の典籍（今でいうと大学准教授）に

（写真1）

任じられた人物です。安政四年（一八五七）には隠居して家で塾を開き、また円城寺村（現在は笠松町）の野々垣源兵衛が建てた学校「培根舎」に定期的に出張して地域の子弟に教授しました。慶応四年（一八六八）に再び明倫堂教授に召し出され、同年に岐阜町に開かれた学校「教倫館」で明治二年（一八六九）に初めて孔子をまつる祭儀が行われたときにも藩から派遣されています。ちなみに、この教倫館は岐阜奉行の要請によって開かれたもので、奉行所の入口近く、つまり伊奈波神社のすぐ北にあり、武士だけでなく町人の子弟も入学できる学校でした。

要斎は、円城寺村に出張・滞在している合間に、岐阜町や加納町、三田洞など各地に足を延ばしており、詳しい日記を付けています。岐阜町に来たときにはしばしば伊奈波神社に立ち寄りました。安政六年七月七日には、瑞龍寺の背後から山に登り伊奈波神社のそばへ下ってきて、初めて神社に参詣しており、そのようすを次のようにしるしています。「因幡（伊奈波）社は大社なり。社の後ろを因幡山という。密樹陰森たり。登る者、あるいは怪異に逢う。ここをもって人行かずという。山上より水わき出て社のかたわらを流れ下る。盥漱盤にこれを受く。祠前、石壇（二十三段）二あり、山泉これを下りて小瀑布の勢をなす（二つ目の壇を下るところなり）」。社殿背後の森が鬱蒼と茂り、入ると怪異にあうという噂のため行く人がないことや、現在もある社殿脇の水流が小さな滝のように流れ落ちていたことが印象的だったことがうかがえます。翌安政七年三月には、伊奈波神社の回りで桜が満開だという話しを聞いて、花見に出かけました。このときにはもう花は散りかけでしたが、社頭から下る参道の両側にまだ見事に咲き誇っていました。ほかに花見客はいなかったようですが、近くの酒楼の上では花を見ながら酒盛りをしている人がありました。よほど気に入ったとみえ、十日後にもまた伊奈波神社の桜について「なお散らずして遠望美なり。次第に開くにや」と書いています。

要斎は花見客がいなかったと述べていますが、柴田家の日記には伊奈波神社社頭で花見をしたことが書かれており、どうやら要斎が訪れたときはたまたま見物人がいなかったようです。柴田家の日記には「山桜盛り少し過ぎ、八重桜盛り」と記述され、境内の桜は種類ごとに時期をずらして満開を迎えていました。要斎が「次第に開くにや」としているのは、複数の品種の桜が順番に見ごろとなることを意味しているのでしょう。写真2は、安政四年つまり要斎が訪れたわずか二年前に描かれた伊奈波神社境内のようすです。要斎が見たそのままの姿で、印象的であった小瀑布も記述どおり二つ目の石段の脇に見えています。参道両側に立ち並ぶ桜はピンクに彩られ、花盛りの社頭を描いたものです。現在と同じように、江戸時代にも伊奈波神社は花見の名所でした。

（写真2）